

トヨタ財団レポート

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

東京都新宿区西新宿2丁目1番1号
新宿三井ビル37F(〒160)
TEL. (03)344-1701~3

Jun. 1983 No.22

第31回理事会・第8回評議員会開催

昭和57年度事業報告の承認など

6月15日(水)、東京において第31回の理事会が開催され、昭和57年度の事業報告・決算報告が承認された。昨年度の総助成件数は181件、総助成額は5億4,089万円である。また国際助成について審議され、これまでの継続分として3件、2,081万円の助成が決定した。フォーラム助成では「アジア資料懇話会」の継続助成が認められた。

なお、理事会に引続き、第8回評議員会が開かれ、財団活動の概要について報告された。

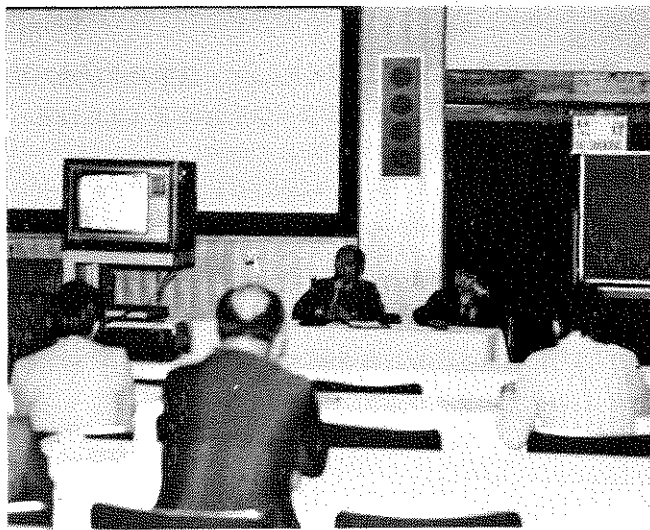
今年度はトヨタ財団が助成事業を開始して9年目に当り、来年の秋には設立10周年を迎えることになる。民間財団の役割は常に社会が若くあるための触媒の働きをすることにある、と言われる。財団の活動自体が若さを失いマンネリ化することのないよう、常にプログラムの検討が必要であろう。

研究助成・公募締切る。

——860件を超える申請を受理——

4月以来公募をしていた研究助成は、予定どおり5月31日の消印をもって締切ることとなった。今年は申請用紙の申込が昨年に比べ2割程度多く、申請件数の増加が予想されたが、果してそのとうりとなった。申請の総件数は864件、総申請額は30億円余となった。今年度の助成予定額が2億8000万円であるから採択率は約9%という厳しさになる。領域別、研究種別の申請件数、申請額は下表のとうり。

領域 種別	交通安全、生活 ・自然環境	社会福祉	教育文化	合計
第I種	69件 1億 1,115万円	41件 6,864万円	95件 1億 3,629万円	205件 3億 1,608万円
第II種	164件 3億 3,523万円	110件 2億 1,078万円	154件 3億 867万円	428件 8億 5,468万円
第III種	103件 8億 6,391万円	64件 5億 1,999万円	64件 4億 6,661万円	231件 18億 5,051万円
合計	336件 13億 1,029万円	215件 7億 9,941万円	313件 9億 1,157万円	864件 30億 2,127万円



研究助成の中間報告会を開催

5月初めから末にかけて、3領域それぞれに2日間にわたって研究助成の中間報告会が行われた。場所はいずれも東京の国際文化会館講堂。1チーム当りの報告時間が15分と短かったため、研究者にとっては、十分に意を尽せなかった点もあったかと思う。昨年10月末からスタートした研究だけに、ようやく軌道に乗りかけたところというものも散見されたが、多くのチームは精力的に活動を展開されており今後が楽しみである。

なお、国立大の委任経理の仕組みのため助成金の使用が制約されたり、大巾に遅れたりという事例も報告され、今後何とかしなければという話ももち上った。財団としても数年来、頭を悩ましてきた問題である。



東南アジア便り No.6

国際部門・プログラムオフィサー
岩本一恵

トヨタ財団国際助成の成果の発表および情報と経験の交流に関連して、この4月にタイで2つの催しが行われた。今回はそのご報告をしたいと思う。

●北部タイ壁画の展示会（4月17日から1ヶ月間シンラパコン大学美術館にて）

この展示会は、「タイ北部寺院壁画の研究」という3ヶ年にわたるプロジェクトを終了したシンラパコン大学のソン・シマトラン助教授が壁画に対する社会的認識づくりを促進するために、同大学学長プリンス・ズバドラディット・ディスクン教授やアスウィット・チャーレンスプクン準教授が中心となり、計画、準備したものである。

研究そのものは、北部タイの9ヶ所の寺院にある壁画を模写および写真撮影し、描かれた当時の社会に関するデータを集め、壁画の内容やスタイルを分析し、美術史的に理論化を試みたものである。そして研究成果の一部である壁画写真を展示し、同時に研究成果を一般向けに編集してその出版を記念したのがこの展示会である。

4月17日、シンラパコン大学美術館では1週間にわたる不眠不休の展示会準備のかいあって、飾りつけも全て終了、開会式を待つばかりとなった。午後3時、マハーチャクリ・シリントーン王女殿下をお迎えして開会式が始まった。学長による王女殿下歓迎の挨拶に続いて、トヨタ財団林雄二郎専務理事がこの研究成果に関する刊行物

王女殿下歓迎の挨拶をするシンラパコン大学学長プリンス・ズバドラディット・ディスクン教授



「北部タイ壁画の構造」を王女殿下に献上、私も壁画の写真で額入りのものを献上させていただいた。王女殿下は1時間半にわたって、100枚の壁画の写真を大変興味をもってご覧になられた。

1ヶ月の会期中、多くの人々が展示会を訪れては、ソン助教授と連絡をとったそうである。展示会はこの後、北部のチェンマイ大学、東北部のコーンケン大学、南部のナコンシータマラート教員養成大学、バンコクのサイアム協会という順序で、各所を巡回することになっている。

展示会も含めてこのプロジェクトの特徴は、次のように要約されるだろう。

1. 中央部タイのみがタイであり、タイの文化が存在するところだという、今までの美術史家や研究者の前提を打ち破り、北部タイにも独自の文化があり、それもタイである、ということを確認し打ち出したこと。既にこの考え方は東北タイにも波及し、東北タイ独特の壁画を調査するプロジェクトが進行中である。（当財団の助成対象となっている）
2. タイの壁画研究という分野では往々にして外国人専門家が多いように見受けられたが、若く力のあるタイ人で、しかも10年以上自費で研究を積み重ねた上で、今回の3年プロジェクトを行って実績をさらに上げた学者が、社会的に注目を浴び認知されたこと。
3. 文化庁に対して、壁画保存の仕方、社会的認識のつくり方を提示したこと。
4. 他の行政当局に対して、壁画の貴重さを理解してもらう機会を作ったこと。
5. 観光促進に関して観光局のやり方に改善が必要であることを明らかにしたこと。

●古文書調査・マイクロフィルム化・翻字および地方語—標準語辞書編纂に関するワークショップ（4月21日～23日、チェンマイヒル・ホテルにて）

このワークショップはタマサート大学タイ研究所の主催で、トヨタ財団が助成を行い、参加者は約40人であった。このうち、発表者は上記の分野における当財団の助成対象者5人で、それぞれ次のような発表を行った。

1. 「北部タイにおける北部タイ語で書かれた^{ばいよう}貝葉の調査とマイクロフィルム化」（チェンマイ大学ソンマイ・プレムチット教授）
2. 「ピツアスローク、スコタイ、カンペンベット諸県における貝葉の調査」（ピツアスローク教員養成大学スポット・プルクサワン助教授）
- 3.



シリントーン王女殿下に成果を献上する林専務理事

「北部タイの貝葉古文献の歴史的文献学的研究—法律と国史を中心に—」（プラサート・ナ・ナコン教授）4. 「ニヤ・クール語—標準語辞書の編纂」（チュラロンコン大学ティラパン・トンクム準教授）5. 「南部タイ語辞書編纂にあたっての諸経験」（シーナカリンウイロート大学ソクラ校南部タイ文化研究所ステイウォング・ポングパイブーン所長）

これらの発表に対して、モデレーターの役割をタマサート大学タイ研究所の人々が受持ち、討論参加者は、北部、東北部、南部の大学で類似のプロジェクトを計画中の研究者であった。一見、眠気を誘うかも知れないテーマの並ぶこのワークショップはしかし、主催側の心配と予期に反し、大変活発で迫力のある発表と議論の続出で、主催者にとっても、参加者にとっても、財団にとっても得るところが大きかった。

それぞれのテーマに関する発表に続いた主な議論は次のとおりであった。1. 机上の計画と現実との間のギャップをどう埋めるか、その際どんな工夫をすべきか、どんな注意をすべきか、2. 地方の研究者の研究や発言を中央はどのように軽視してきたか、また恐れてきたか、3. 研究は学問の発展のみのためになされるべきか或いは、地方の一般の人々のために役立つようになされるべきか、4. 研究の成果はどのように利用されるべきか、5. ゲリラ地区での調査を安全に行うにはどうしたらいいか、6. 外国人研究者によるデータの独占にならないようにするためにはどうするか、等。

2日間にわたるワークショップ、1日のフィールド・

トリップを終えて、参加者の感想を聞いてみたところ、次のような解答が返ってきた。

中央が音頭を取ってこれらのプロジェクトを地方へ下していったのではなく、地方の研究者の発意でプロジェクトが進行してきた、それが全国的に連絡を取り合う状況にまでなったという点が大きな特徴である。これまでは互いに、どこで何が行われているかがわからなかったし、経験の交流もほとんどなかった。このワークショップを契機に、地方の研究者による研究の質や量が地方の研究者どうし及び中央の研究者にとって明らかになった。地方の研究者は孤立感を払拭し、自信を強め、かつ、自分達の活動の位置づけができた。また、このワークショップを通して得られた知識と洞察から、常々直面してきた問題の解決に対するヒントが出て来たので、自分達のプロジェクトや計画を軌道修正することができる。一方、自分達の研究は、タイの地方文化の根を探るものであり、過去の文化を研究することによって、現代の人々にタイ人がどこへ向いつつあるのかを指し示す、という大きな役割を担っているのだ、という確認（自覚）ができた。勿論その際、ローカリズムやナショナリズムにこり固まることのないように注意するべきである。また、将来展望としては、各地方で調査実績を踏まえての比較研究によってタイ人とは何か、各地方間の関係はどうだったのか、を明確にする試みを行ったり、さらに、マレーシア、インドネシアやビルマ、ラオス、カンボジア等隣国との間にまでもそれを広げて行ってみたい。等々。

なお、このワークショップの報告書は7月頃にタマサート大学タイ研究所から刊行される（タイ語）予定である。

ワークショップで活発な議論中の発表者と参加者





事業 東南アジア諸語辞書編纂出版助成 紹介

■「現代ベトナム語大辞典」と「タイ日辞典」について■

昭和56年度より開始された東南アジア諸語辞書編纂出版助成は、「隣人をよく知ろう」翻訳出版促進プログラム（東南アジアの文学作品，社会科学書等の日本語への翻訳出版を促進することを目的とするプログラム）を実施している過程で生まれた助成プログラムである。西欧の言語の場合と比較して，東南アジアの言語から日本語に翻訳される作品は少ない。また，それらの言語を学習する人々の数も少ない。さらに翻訳や言語学習の基本である本格的な辞書があまりにも少ない。こうした現状を鑑みて，東南アジア諸語辞書編纂出版助成では，辞書編纂の準備がある程度進められており，申請後約3年以内に編纂と出版が完了する見込みのある場合に限り，編纂作業費と出版費用の助成を行っている。当助成を受けて，「現代ベトナム語大辞典」と「タイ日辞典」の編纂が現在進行中である。

「現代ベトナム語大辞典」—————*

慶應義塾大学言語文化研究所の川本邦衛教授とそのスタッフが編纂を進めているこの辞典は，日本で初めての本格的な「ベトナム語—日本語辞典」を目指している。川本教授は十数年前から辞書編纂計画を立て，基礎語彙カードの作製を行ってきた。現在基礎語彙カードの数は約10万枚となり，今回それらのカードをもとに，見出し語彙数約4万8千語の辞書の編纂を進めている。

20世紀初めまでベトナム語は変形ローマ字ではなく漢字表記であったが，この辞書では，その漢字を示す点と，編纂にワードプロセッサを活用する点で画期的な性格を持つ。ベトナム語は日本語と同様に，文字を持たない言語であったが，中国から漢字が伝わると，漢字を文字としてとり入れた。しかし17世紀に宣教師達によって考案された変形ローマ字による表記法が，漢字に代って19世紀から20世紀に普及し始め，1920年代には変形ローマ字が唯一の表記法となり，現代のベトナム人は漢字を使用

することは皆無となっている。しかし現代ベトナム語の文化語彙は概ね漢字語彙であり，それらが本来はどのような漢字字音の反映であるかを示すことは，日本人のベトナム語学習にとって非常に有利である。そこでこの辞書では漢字語彙については，その漢字を示すこととした。

いま一つの特徴として編纂にはワードプロセッサを使用する。ベトナム語の変形ローマ字の特殊性と漢字部分の複雑な表記のため，誤植のない正確な印刷を行うには，本来ならば校正を5回以上行わなくてはならない。しかし原稿をワードプロセッサに打ちこみ，そのアウトプットをコンピューターを通して，電算写植印刷に連動させることによって，校正の回数を減らすことができる。印刷のための活字は，慶應大学言語文化研究所が昭和46年に製作した現代ベトナム語の字母の活字母型を活用する。

「タイ日辞典」—————*

大阪外国語大学の富田竹二郎教授は過去三十数年間「タイ日辞典」を作るための準備を行ってきた。「タイ語—日本語辞典」としては，戦前に外交官の奥野金三郎氏が編纂した「タイ日大辞典」があったが，見出し語彙数は2万語に満たず，すでに絶版になっている。それ以後本格的な「タイ語—日本語辞典」は出版されていない。富田教授は見出し語彙数約4万語で，用例の多い，豊富詳細な内容を持った辞典を編纂する計画である。現在までに出版されているタイの国語辞典，および「タイ英辞典」，「暹漢辞典」等を参考にするほか，タイの百科辞典その他の専門分野に関する辞典を有効に活用する。

タイ語は特殊な文字を使用する言語であるため，活字を使って日本で「タイ日辞典」を印刷することは，組版作製および校正に費用がかかりすぎ，経済的にほとんど不可能である。そこで富田教授とそのスタッフはタイ語のタイプライター，特殊な発音記号を打つために英文タイプライターを改造したもの，および和文タイプライターの3台を駆使して版下を作製している。（若山記）

「タイ日辞典」より

<p>ก (เกาะの略字 音綴は kō?, 語音は kō) ej. (明示された，または既知の仮定または条件を受けて主節を導く。主節の主語の後に置く) それで，したがって，それでも ; なお，やはり ; ~もまた ; じゃあ ; だって~ ; つまり~ ▶ กินแล้วก็นอน นอนแล้วก็กิน 食っちゃあ寝，寝ちゃあ食う。ฉันไป เขาก็ไป ぼくが行けば彼も行く，ก็ฉันไม่รู้มัน だってあたし知らないんだもん。 ก็เมื่อวานนี้ทำไมไม่มาเลย じゃあ，昨日はどうして来なかったのか? ถ้าไม่กินก็หัว 食わねば，</p>	<p>ถึงก็ช่าง ไมถึงก็ช่าง 着こうが着くまいがどっちでもよい。 เขาจะหักก็ช่าง ไม่หักก็ช่างเขา เราไม่สน 彼がしようがしまいが放っておけ，関心は持たぬ。 มา หรือไม่มากก็ช่างหัวมันอะไร 来ようと来まいと勝手にしろ ก็ดี คุยดี di~ならばよい ; ~であるうと~であるうと ▶ ดาคุณมาโตก็ดี あんたが来れるといいのに。 หญิงก็ดี ชายก็ดี 男であるうと，女であるうと。 มากก็ดี ไม่มากก็ดี 来てもいい，来なくてもいい。 บิดาก็ดี มารคาก็ดี ยอมรักบุตร 父親であるうと母親であるうと</p>
--	--



助成刊行物紹介 (成果発表助成)

「地域自治の改革構想」

菅原良長 著

新紀元社刊 A5 478頁 9,700円

社会や制度の現状に対して部分的にその問題点を指摘し、改善案を提示することは、ある意味で易しい。また、今ある状況を全面的に否定した上で、抽象的に理想像を描き出すこともそれ程難しくはなからう。しかし、現状の問題点を一つ一つ検討した上で、それらを総合的に評価し、目標とすべき全体像を具体的な形で提示することは実に大変な作業ではないかと思う。地方自治制度についてその困難な仕事をやってみたのが本書である。すなわち、著者は、現行の『地方自治法』の問題点を洗いだし、それを全面的に改めたものとして『地域自治法』を構想し、その「法案要綱」という形で 617条に及ぶ内容を具体的に明示、提言しているのである。

現法との比較でその主な改革点を示すと、①現法を『地域自治法』と『権限・財源再配分特別措置法』の2本に分離する。②「地方自治」「地方自治体」の概念を「地域自治」「地域政府」として捉え直す、③3編17章の現

法の内容構成を抜本整理し6編27章で構成する、⑤統轄的な基準法としての性格をもたせ関連法令を吸収・統合する。⑥「三層政府」の序列関係を逆転させ基層政府(市区町村)優先主義を貫く、⑦憲法規定条項については明文をもってそれらを導入し、憲法と新法の不即不離の連結関係をつくる、といった諸点である。

本書のもととなった研究は昭和55・56年度の当財団の助成対象「都市の時代の自治制度への構想と提言」(松下圭一他4名)である。著者はその共同研究者であり、当該研究の中心的な推進者であって、本書はその研究会に提出された《第一次・菅原案》という性格をもっている。要綱の作成に先立ち、これまでに公表された約3000件の文献資料が検討されたが、その文献目録は本書の第三部に「戦後自治文献資料集成」としてまとめられている。(なお、第一部は「地方自治制度の改革構想」、第二部は「地域自治法案要綱の提案」)

このような「法案」として執筆された書物をどのように読むべきか、法律に素人の私には正直のところよく分らない。しかし、その実現性はともかくとして、問題提起の書としての意義は大きいのではないかと思う。(山岡記)

助成刊行物紹介 (「隣人をよく知ろう」プログラム)

「ゲリラの家族」

プラムディア・アナンタ・トゥール著、押川典昭訳
めこん刊(プラムディア選集1) A5 332頁 2,500円

本書は、現代インドネシア文学の巨峰の一人であり、ノーベル文学賞候補の呼び声もあるプラムディア・アナンタ・トゥールの初期の代表作である。

物語はインドネシア独立前夜のある一家族を描いている。官吏を辞しベチャ引きをして家族を養いながら都市ゲリラに加わる長兄サアマン、兵隊相手の商売で父親の異なる7人の子を産み今は狂った母アミーラ、ゲリラ兵として蘭軍との戦闘で各地を転戦する次男と三男、貧窮の中に取り残された三人の娘と末息子の家族の壮絶にして悲惨な姿が描かれる。

サアマンが捕えられる。独立という大義ある戦いに加わりつつも、戦争が引き起こした一人一人の心の苦悩が丹念に語り起こされていく。植民地軍兵士と恋愛を重ねては暮してきた母には独立戦争という事態が理解できず、若く美しかった日々の思い出に逃避し、現実離れた繰

り事をつぶやき続ける。ゲリラ基地に居る次男は戦闘で醜く傷ついた顔のせいで娘達から疎まれていと悩み、三男はオランダ側についた父を殺害した罪の意識にさいなまれている。二人は次々に戦闘の中で倒れる。

サアマンを収容する刑務所の所長は、オランダ人との混血児でサアマンとの対話を通して激しい心の動揺を感じて、密かに彼から家族にあてた手紙を届ける。敵の側に立たされてしまった人々の姿も無残である。処刑の時、サアマンは死を前にした迷いを振り切るかのように絶叫する。「アッラーフ・アクバル(神は永遠なり)」そして「ムルデカ(独立)」。この叫びに呼応して、刑務所の内と外から大合唱が湧き起こるのである。

独立闘争を若くして体験した世代の代表的知識人として著者が語り継ごうとした物語は「独立のための戦い」という言葉の持つ輝かしい印象からは隔りがある。だがそれだけに、生身の人間達の苦悩に満ちたしかし力強く、また悲しい本物の物語として、読む者に深い感動を与えてくれる。(牧田記)





活動報告

第15回研究報告会

テーマ：「ことばの壁をこえるため—日本における
諸外国語辞書の作成の問題点—」

日時：昭和58年3月25日(金)1:20~6:00

場所：東京都千代田区紀尾井町 上智会館

プログラム：

特別講演 「日本における諸外国語辞書の役割」

慶応大学言語文化研究所 鈴木孝夫

研究報告1 「言語を通しての文化の伝達」：和独辞典
チュービンゲン大学 江澤建之助

〃 2 「斬新な発想に基づく漢字学習法」：漢英字典
昭和女子大学近代文化研究所 ハルベンジャック 春遍雀来

〃 3 「ポルトガル語圏の日本語学習状況」：和ポ
辞典 上智大学外国語学部 佐野泰彦

特別講演 「ワードプロセッサの登場により辞書はど
う変わるか」

国立国語研究所言語計量研究部 野村雅昭

総括討論 「これからの諸外国語辞書作りでは何が問
題となるか」

今回の報告会は、財団の昭和56年度研究助成でとり
あげられた3件の辞書作成に関するプロジェクトの研究
報告を中心に、文化交流のベースとしての辞書という
観点と、ワープロ時代における辞書という観点との
両面から、今後の辞書作りのあり方を探ろうという主
旨で企画された。

最初の特別講演で鈴木氏は、従来の辞書が西欧近代
の文物を「輸入・受信」するための道具としてもっぱ
ら作られてきた点を指摘し、日本が全世界に向けて経
討論：左より鈴木、江澤、佐野、野村、春遍の各氏



済進出を行うようになった現代にあっては自らの文化
なり価値観なりを「輸出・発信」することが必要であ
り、辞書もそのための道具として機能するように作ら
れるべきであると論旨を展開した。

研究報告1では江澤氏から、現在作業を進めつつあ
る「輸出発信型」和独辞典のフレーム作りについて報
告があった。この中で、辞書は辞書から作られるとい
う固定観念を捨てるということ。日本固有の事物につ
いては百科事典的記述にするなど従来の字引きの概念
を変える必要があるということ。また、コンピュータ時
代にあっては辞書の窮極的イメージとして日独文化対
応データベースのようなものを描き、書物型の辞書は
そこからの派生物としてとらえる方が適当であるとい
うことなどが指摘された。

研究報告2では春遍氏から、外国人の漢字学習の効
率化を最大の眼目とする漢英字典作成の概要について
報告があった。この字典は氏が既に8年にわたり作成
にとり組んでいるもので、漢字のパターン認識に基づ
く検字法や、漢字の中心概念の英訳とその単語をもと
にした漢字の派生概念の説明など、外国人初学者の記
憶の負担を最小にするような工夫が様々に盛り込まれ
ている。

研究報告3では佐野氏から、ポルトガル語圏で最大
の人口を擁し、かつ日系人80万人をかかえるブラジル
を例にした海外日本語学習者の状況の概説と、現在作
成中の「現代和葡辞典」について、1603年刊の「日葡
辞書」との比較も含めての報告があった。

特別講演の二つ目として野村氏は、辞書とコンピ
ュータとのかわりについて、コンピュータを利用した
辞書編纂という面と、コンピュータやワープロに内蔵
される辞書という面の二面から論じ、今後の技術進歩
にともなう変化の見通しを提示した。

この後、当日の報告者全員にフロアからの発言者
もまじえて、今後の辞書作りのあり方をめぐる活発な
討論が行われた。当日の出席者は140名と、会の内容
から予想された人数をはるかに上回り、この問題に対
する一般の関心の高いことを伺わせた。(なお、当日配
布資料の余部がございますので、ご希望の方は切手240円分
をそえて財団レポート係までお申し込み下さい)

(久須美記)



セミナー紹介

「地域小集団による住居の生産と適応の技術」

筑波大学講師 安藤邦廣

・開催場所 マニラ市フィリピン大学

・開催日 1983年3月23日

・プログラム

1. 挨拶 A. フギロン (フィリピン大学建築学部長)
2. 基調報告 G. マナハン (フィリピン大学教授)
3. ケース・スタディ(1)―フィリピンの地方都市及び農村部―T. ブエノブラ, E. タン, M. マグティバイ
4. ケース・スタディ(2)―マニラ首都圏―G. パルフィ (東京大学)
5. ケース・スタディ(3)―ルソン山地民ボントク族―乾尚彦 (北海道工業大学)
6. ケース・スタディ(4)―日本の近世民家―安藤邦廣 (筑波大学)

フィリピンの住宅問題は実に深刻である。フィリピンの総人口4900万人のうちおよそ3分の1が都市部に住み、そのまた3分の1の約500万人が首都マニラに集中する。このような人口の都市集中率は益々上昇する一方である。にもかかわらず、フィリピンでは他の開発途上国と同様、工業化や輸出の拡大等の経済上のよりさし迫った問題のために、住宅問題は比較的低い優先順位しか与えられていないのが現状である。そのため現在マニラでは、スラムに住む80万人の人々を含め、少なくとも約80万戸の住宅の改良又は新築の必要があると推定されている。これは現在のマニラの世帯数とほぼ同数であり、その住宅建設は膨大な事業となる。新しい住宅生産システムが必要とされているのである。

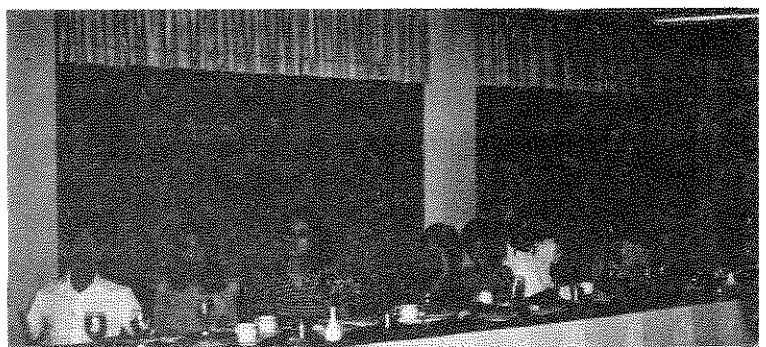
このような状況の中で、このセミナーは、トヨタ財団の研究助成による国際共同研究の成果発表の場として、またフィリピン大学の75周年記念行事の一環として開催された。この研究は自らの住環境を自らの手で、地域で自給できる材料・エネルギーを用いて生産維持する方法の可能性と限界を探るために、フィリピンをそのケース・スタディの対象として、フィリピンと日本の共同研究として進められてきたものである。

セミナーでは、まず日本側研究者から、日本における

住宅生産の工業化の功罪に触れつつ、高度成長期の日本と同様に大量の住宅不足に悩むフィリピンの住宅生産は、その地域共同体の自律性の高さに着目し、それを活性化する方法で行うことの有効性が主張された。そのモデルとしてマニラ首都圏のセルフ・ヘルプによるリセットメントプロジェクト、ルソン北部山地民ボントク族、そして日本の近世民家の事例が報告された。これに対してフィリピン側研究者からは、フィリピンの地方都市と農村部における事例が報告され、そのなかで特に地域産材である竹・ヤシ等の有効利用技術の再評価が強調された。このような材料はフィリピンの各地域内で自給・再生産され、その利用技術は現存し、またそれによって作られた住宅は鉄板やコンクリート・ブロックで作られたものよりはるかに快適であることから、その利用技術の促進、改良が主張された。しかしながら一部の地域ではこのような地域産材は、新建材にとって代る過程にあり、その背景には新建材の使用が社会的地位を表すものとみなされていることが指摘された。このことは自からの手で住環境を作り出していた伝統社会から、住宅が供給・販売される都市社会への変化の過程にあることを示すものであり、このような地域産材の利用技術は、地域共同体の存在と切り離して考えることはできないことを示しているように思われた。

住宅問題に対してこのような方法で調査研究が試みられたのはフィリピンでは初めてのことであった。特に伝統的生産技術を克明に再現記録したことは、それが外国人によって行われたという事情も加わって、参加者に一様の驚きを与えた。参加者からは主としてその調査の方法について熱心な質問が集中した。

このように住宅問題に対する研究のひとつのアプローチを示し、その有効性について参加者の理解と共感を得たことは、このセミナーの最大の成果であった。幸い参加者の大半は30才前後の若手研究者・建築家であり、また調査はフィリピン各地で多数の地元研究者の協力を得て進められたので、これを機会に、このような方法論による研究がフィリピン人自身の手によって展開されることを期待したい。





報告会案内

トヨタ財団第16回研究報告会

昭和58年7月9日(土)10日(日)
東京都港区六本木国際文化会館

〈プログラム 7/9〉

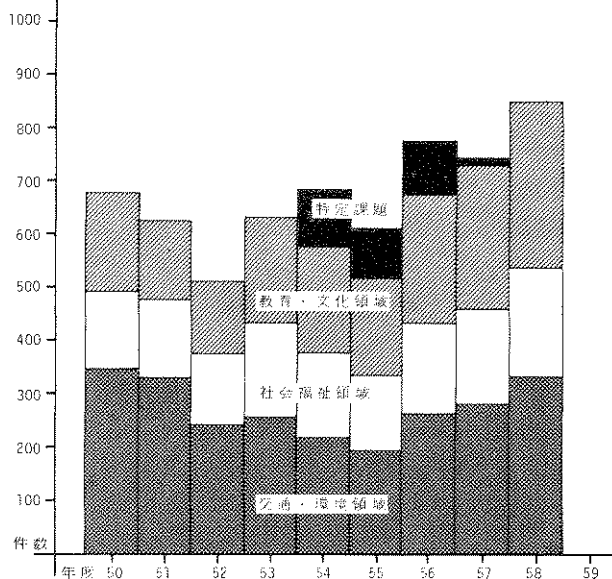
- 1:30 開会挨拶 (財)トヨタ財団 林雄二郎
 1:40 第1部 アイヌの疾病と治療法
 司会 筑波大学社会医学系 小町喜男
 研究報告1 アイヌの疾病観と治療観
 北海道開拓記念館 藤村久和
 研究報告2 アイヌの治療法と治療薬
 北海道立衛生研究所 木下良裕
 コメント1 文献によるアイヌ治療史研究から
 北方史料研究会 谷澤尚一
 コメント2 医学研究の立場から
 順天堂大学医学部 酒井シズ
 質疑・討論
 3:40 <休憩>
 4:00 第2部 沖縄の信仰治療
 司会 聖心女子大学文学部 吉田禎吾
 研究報告1 沖縄における精神病治療の現状
 沖縄県本部記念病院 高石利博
 研究報告2 沖縄のシャーマニズムと信仰治療
 東北大学文学部 大橋英寿
 コメント1 宗教人類学の立場から
 駒沢大学文学部 佐々木宏幹
 コメント2 精神医学の立場から
 角館総合病院 久場政博
 質疑・討論
 6:00 <懇親会>

〈プログラム 7/10〉

- 10:00 第3部 民俗医療研究の現代的意味と
 今後の研究課題
 司会 医療情報システム開発センター 大島正光
 報告1 第1部の討論から 小町喜男
 報告2 第2部の討論から 吉田禎吾
 話題提供 東洋医学の立場から 芹沢勝助
 話題提供 現代医学の立場から 大島正光
 意見交換 今後の研究課題
 各報告者、コメンテーター、他有志
 1:00 <閉会>

この報告会に参加ご希望の方は、7月2日までに、ハガキにて財団レポート係までお申し込み下さい。参加は無料です。なお定員は第1、2部(7月9日)は100名、第3部(7月10日)は20名としますので希望者多数の場合はお断りすることもございます。ご了承下さい。

研究助成 領域別申請件数推移



上のグラフは研究助成の申請件数の推移を領域別に分けて示したものである。昭和51年度の落ちこみを別とすると毎年600件以上の申請があったことになる。56年度からは700件を越え、本年度は800件を越えてしまった。財団の助成金はこのところ一定であるので選考は益々厳しいものとなってくる。もう少しテーマを重点的に絞ることによって申請件数を減らす努力も必要ではないかと思われる。

〈編集後記〉

▶毎年研究助成には外国人や海外の日本人などからも多数申請をいただいておりますが、今年度、海外の数百の日本研究機関にも公募案内を行ったところ、例年を上回る多数の申請が寄せられました。内訳は、海外在住の日本人より21件、日本在住の外国人より10件、海外在住の外国人より28件です。特に海外の外国人で、アメリカの8件に次いでオーストラリアの6件というのが意外でした。
 ▶これらの申請すべてにお応えするのは不可能ですが、この種のニーズに門戸を開いてゆくのもこれからの民間財団の役割のひとつだと思います。

トヨタ財団レポート No.22

発行日 昭和58年6月25日
 発行所 財団法人 トヨタ財団
 発行人 山口日出夫
 編集人 久須美雅昭
 印刷 真友工芸株式会社

このレポートを継続してご希望の方はハガキにて財団レポート係までお申し込み下さい。無料です。